

学び、研究にはチームワーク養成も大切だ。  
ここにくると、ゼミが活性化する。



野崎真澄教授

美しい海を前に、寝食を共にする。  
あなたのゼミは、一挙にまとまり、研究の成果が上がりますよ。



新潟大学理学部  
附属臨海実験所

1953(昭和28)年、新制大学初の認可。翌年、旧金泉村より土地と建物の寄付を受けて発足。現在の建物は、1985(昭和60)年に全面改修。学部教育、学内公開臨海実習、他大学向け、大学院教育、社会教育活動を行う。



日本海、佐渡島。相川海中公園が、理学部附属臨海実験所の前に広がります。

海外府の入り口を飾る絶壁が続くところで、尖閣湾の遊覧船乗り場がすぐその場所にあるのです。

取材班を迎えてくださったのは、ここの所長を兼ねていらっしゃる野崎真澄教授と東藤孝助手のお二人。

ここの魅力についてお話を伺い、船にも乗らせていただきました。

「夏の臨海実習がメインです。きれいな海を見たいんですね。沖縄もきれいだけれど、透明度では佐渡が上です。30mくらいあります。太平洋側は、1mがいいところでしょう。定点観測もしていますが、透明度は上がってきているんですよ。また、この海は汚染されていないことが、イボニシによる汚染度の調査などでわかっています。イボニシの調査は、体験もやりますよ。」



海水を濾してプランクトンを食べ、そのため海水中の毒を蓄積してしまうフジツボなどの貝。それらを食べるイボニシ貝は、体内に毒を濃縮するためこむ。人工化学物質

(環境ホルモン)によって汚染された海は、イボニシの雌にペニスを与えることから、環境ホルモン汚染のモニタリング動物として注目されている。現在、環境ホルモン汚染を免れている地域は、日本全国に佐渡島など数カ所しかない。

海は、いのちの源。多様性も、陸上とは比べものになりません。尖閣湾をグラスボートで海中の世界を見ている観光客も、その神秘的な世界に畏敬の念を持つでしょう。

附属臨海実験所では、学外にも門戸を開き、親子ファミリーサマー教室、中高生・理科教師向けの実習を行っています。『海』を現場にして学ぶ喜びが広がり、年間2,000名を越える利用者がいます。また、全学部生を対象にした公開臨海実習も行っているため、ぜひ参加を検討してほしいも

臨海実験所の連絡先・参照情報  
〒952-2135 新潟県佐渡郡相川町達者 TEL:0259-75-2012 FAX:0259-75-2870  
mailto:f10048@ccfsv.cc.niigata-u.ac.jp  
http://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/sadomarine/index.html

# 海は、いのちの源。 多様性は、陸上と比べものにならない。



ここ、達者から約2kmの海岸は、海底爆発で隆起した岩からなる岩礁海岸。土砂の濁りが無いことから透明度はとて高いのだそうだ。絶景。

のです。ただし、毎年募集人数よりも応募が多いのでご注意ください。

## 実習は大変だけど、楽しいね。

「宿泊合宿ですから、寝食を共にするわけです。一挙にまとまりますよ。」と、野

崎教授は笑顔で語ります。研究は、『比較内分泌』。研究の喜びと、実習の喜びは違いますかとたずねると、すかさず「実習は、大変だけれども楽しいね。ほんと。」とまた満面の笑顔付きの応えが返ってきました。

(編集部)

### 「島と侮るなかれ、 佐渡の器も大きいぞ」

大学院自然科学研究科 博士後期課程 3年  
大湊 国弘

波高6mで完全な孤島となり得る佐渡島の臨海実験所に、五十嵐キャンパスとの断絶感があるのは否定しない。しかし、佐渡は居良いか住み良いかと訊かれれば、答えは「良い」である。理由は『論語』の「学而第一」の最初の一文を実感出来るからか。特に「有朋自遠方來、亦不樂乎」のように、仕事で赴任してきた高校や学部時代の友人知人、あるいは地元の方との語りいは、地理的に刺激の少ない研究生活にメリハリを与えてくれる。



### 快適な佐渡モバイル生活の弱点は、 メインキャンパスの掲示板！

大学院自然科学研究科 博士前期課程 2年  
大島 康夫

佐渡に移り住んでから今年で三年目。豊かな自然の中、メインキャンパスでは味わえない生活を送っています。インターネットやモバイルの普及により、一般的な情報や友人との連絡に不便は感じませんが、奨学金など大学生活に関する重要な情報がメインキャンパス内の掲示板を通してのみ行われているため、連絡が来ず苦労しています。このような点を改善していただければ、外部での研究活動をより安心して行っていけると思います。



当たり前だが、夏に臨海実習は集中する。岩礁海岸の魅力を大いに活かしたシュノーケルを使った実習などが人気。



宿泊は、臨海実験所内。おきまりの二段ベッドだが、意外にも新しくきれいだった。



フカウラヒドラ  
未同定のイソギンチャクとして永年保管されていたもの(生時の色彩はない)が、世界で最初のフカウラヒドラの記録であることがわかった。  
外見がイソギンチャク類に類似する単体のヒドロポリプ。高さ約20mm。